

## 物語のアラベスク part 7

高柴慎治

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）  
第11巻第1号（2012年9月）抜刷

## 【研究ノート】

## 物語のアラベスク part 7

高柴慎治

現在、「物語のアラベスク」と題して、澁澤龍彦が書き残した物語の考察を試みている。考察の際の基本的なコンセプトやその方法については、すでに「物語のアラベスク」(『国際関係・比較文化研究』第5巻 第1号(\*1))に記したので、ここではくりかえさない。以下に掲げる考察の位置関係がわかるように、全体の目次のみを「後注」として最後に示しておいた。

(\*1) 静岡県立大学国際関係学部、2006年9月

『高丘親王航海記』  
「蛮人」(6-D)(\*1)

親王一行は盤盤国の投拘利<sup>ウコラ</sup>という港から太守の家臣たちに見送られて出発し、ガンジス河口の多摩梨帝<sup>タマリテ</sup>という港を目指す(\*2)。しかし、一行が乗った船は偏西風に吹き飛ばされてどこかの蛮地の浜辺に座礁してしまう。親王らは巨大な竹林で、犬頭人(全身すはだかで、頭だけが毛むくじゃらの犬)と出会う。犬頭人は立派な唐音でしゃべる。いまいるところはアラカン国であること、五百年前にチャンドラという名の王が建国していらい、驃<sup>ビョー</sup>(ビルマ)国にも南紹国にも一度として属したことがないこと、国の特産物とてないが、国の背後の山脈を越えて伊洛瓦底川<sup>イラワジ</sup>の流れをさかのぼると山中の別天地ともいふべき雲南地方にいたるのだが、ここからの特産物(麝香や翡翠や琥珀)がアラカンの海岸まで運ばれて交易されているのだと告げる。

この犬頭人は股間に鈴をぶらさげているのだが、その理由を安展が問うと、犬頭人はこんなことを語る。——百年ほど前に国に好色淫靡の風がはびこり、女どもが犬を相手にたわけるといふことが頻々におこった。結果、犬頭の男がぞくぞく誕生することになり、憂えた王が国中の犬をのこらず殺してしまったが、犬頭人が生き残ったかぎりどうしようもないので、彼らに貞操帯として鈴をつけさせたという。……そう悲

観的になるなと慰める安展に、犬頭人は、自分たちは未来のことがよくわかるのだといい、四百年後にはヨーロッパからマルコ・ポーロ、オデリコ、カルピーニ、それにアラビアからイブン・バットゥータといった旅行家がやってきて、どこで聞きかじったか、犬頭人の噂を世に広めることになるはずだ、などと長広舌をふるう。種明かしめたいいい方をしてしまえば、作者が挙げている個々の人名の記録にはこんな奇妙な話はなく、ルイス・デ・カモンイスの『ウズ・ルジアダス』というポルトガルの叙事詩の一節をそのまま膨らませて描いている。詳しくは(\*3)を参照していただきたい。

便乗する船を求めて港にやってきた親王らは、ハサンというアラビヤ人商人から、商売に協力してくれたら船に乗せてやるといわれる。そこで商人は、「蜜人」を取りに行くよう依頼する。蜜人とは、人間の屍体の乾燥したもの（つまりミイラ）で、バラモンが捨身して衆生を済度せんと発願し、山中で飲食を絶ち蜜のみを食って最後に死に果てる。五体は腐らずに馥郁たる香を放つというしろもの。

貴重な薬品になるという蜜人は、山脈を越えた乾燥した砂原に多く散らばっており、取りに行くには、帆を張った車つきの丸木舟を漕いでいくのだという。みなは反対するが、親王は蜜人を眺めて不浄観をこらしたいと自ら出かけることにする。……アラク国<sup>イラウワ</sup>の国境を越え、眼下に伊洛瓦底河を眺めながら上流を北へ向かう。見わたせば、雲のかなたに雲南の山々が見える。「なぜともなく、親王はなつかしいふるさとにでも帰っていくような気がして、こころがはやるのをおぼえた」。やがて大理盆地の中心にある洱海が見え、蒼山や鷄足山も見えてくる。正午に出発してすでに夕焼けが周囲に広がっている。「こういうとき、きまって親王は眠くなるのであった」。そしてこんな夢を見る。

——三十代半ばの親王。場所は高野山。空海和上に挨拶をしようと、堂のなかをのぞくと、和上は護摩壇の前に坐して陀羅尼をととなえている。壇には孔雀明王の像やら羯磨杵<sup>かつましよ</sup>やらが安置されている。ふりかえった和上の顔はすでに生きている人間のものではなく、金泥を塗り玉眼をはめた木造にひとしい、こわばった無表情な顔だ。和上は、親王がさきほどまで杉の木にのぼっていたのは「きっとそこから天竺を望見なさろうというお気持ちがあったからでしょう。(中略)あなたはいずれ天竺へいらっしゃるおつもりなのでしょう」といい、いずれ南海諸国を歴訪することまで予言する。そのとき、壇の上の孔雀明王を背中にのせている孔雀の像が動いたような気がして、よく見ると、驕慢な鳥の顔が菓子顔に見える。気がつくと、親王は孔雀明王になって孔雀の背中にのっている。「おさらばじゃ、みこの禅師。天竺といわずとも、どこかでふたたびお目にかかることもあろう。それを信じていてください」と和上が告げる。背中に親王をのせたまま孔雀は空に舞い上がる。鳥の背中にのって空を飛んでいると思っていたが、実は空飛ぶ丸木舟のなかにいた。

この章は、丸木舟という奇妙な乗り物によって空間を大移動しているのだが、その割には内容の変化は乏しいように思う。大づかみないいい方をしてしまえば、「蜜人」

という言葉に導かれて（最初にアラビア人から蜜人のことを聞いたとき、親王は「ゆくりなくもわが師空海和上のことを思い出す）雲南までやってきて、いま述べたような夢を見る。夢から覚めた親王は、洱海のそばの鷄足山のいただきに降下する。そのいただきの石窟ですでに蜜人（木乃伊）と化した空海和上に再会して涙を流すというものだ。再会する場面を澁澤はこう記している。

「それ（結跏趺坐して人間のかたちをしたもの——引用者注）は漆をかけられ、玉眼をはめこまれて、すでに生きている人間のそれではなくなっていたが、親王が夢の中で見た空海和上のおもかげにおどろくほどよく似ていた。いや、夢の中の和上に再会したとしか思えなかった」。

ここで澁澤が描いている「夢」について、もう少し踏み込んで整理しておこう。この章にかぎらず、すべての夢に共通するのは、なにかに会うとき必ず夢が先行するという形をとることだ。そして、その夢と同一の（あるいはその延長の）事柄に出会う。ただし、すでに記したように夢は記憶ではない。過去にあった事柄を夢で再現しているのではなく、夢はあくまで親王の観念が生み出した独自の形象を帯びている。そして、その夢が現実化するという構造。すでに「儒艮」の章の（\*1）で示しておいたように、「夢」と「現実」という対比において、「夢」が「確かな現実」として提示されるという転倒をすべての夢は孕んでいる。あえて夢の話形としていえば、澁澤の描いている物語は、『ギルガメシュ叙事詩』以来の古代的な話形に酷似している（鷄足山に降下したとき、「この山で空海和上に会うことができるのではないかという、漠然たる予感のごときものが胸にきざしていた。まるで理由のない予感であるが、こういう予感のほうがむしろ信用するに足る」とある）。ただし、夢を介して実現されているものは「神意」ではなくあくまで独自の想念であり、観念である。

もうひとつの共通点にも触れておきたい。それは「夢」と「時間」にかかわることだ。さきに「蘭房」の章では「過去」を、「猿園」の章では「未来」を夢見ると記したが、実は「夢」において「本質」が現われ、その本質は遍在するという方向で描かれる以上、物語に内在している「時間」は「無化」されていくことになるのを避けることはできない。だから、正確には、「蘭房」の章も「猿園」の章もそこにあるのは消去されていった時間によって成り立つ非在の空間だといふべきなのだ。「蜜人」の章においても、親王は非在の空間を旅している。作者は物語のなかで「本質」を遍在させつつ、同時に「本質」が帰属する空間をひとつのトポスとして与えていく。それが「雲南」であり、そのトポスに近づくとき、親王はすでに引用しておいたように「なつかしいふるさとにでも帰っていくような」気がするのである。なぜ蜜人（木乃伊）なのかは、断わるまでもないだろうと思う。それは「時間」が無化した存在、あるいは永遠に存在しつづける存在なのであり、後の「頻伽」の章においてもくりかえし変奏されることになる。

（\*1）『大漢和辞典』の「蜜人」の項に「木乃伊の異名」とあり、『輟耕録』の「木乃伊」を引いて

いる。内容は、回りの田地に78歳の老人がいて、自らの身を捨てて衆を救いたいと考えていた。飲食をせず、蜜を食って生きていたので、便がすべて蜜になった。老人が死ぬと国人らは石棺に蜜を満した中に彼を入れて墓に埋めた。百年後にふたを開けてみると、中はすべて蜜になっている。……俗に蜜人というたと記されている。

(\*2) 澁澤は本文で、両港の名をプトレマイオスの『地理学入門』（2世紀）に求めている。また、タマリテイについて、5世紀初頭の法顕も入竺旅行の帰途にこの港から商船に乗っていること、7世紀末葉の義浄もスマトラから船でベンガル湾を乗りきってタマリテイにたどりついていることに言及しているが（前者は『仏国記』（別名『法顕伝』）、後者は『南海寄帰内法伝』）、詳細については省く。

(\*3) マルコ・ポーロ『東方見聞録』（13世紀）中の該当箇所と思われるところを引いておく。以下の記述はジャヴァ地方を去って西方に100マイル航行して、現在のアンダマン諸島に到着した時点のものだ。「双子島をたつて、西方に百マイル航行すると、アンガマン〔晏陀蛮国〕という、豊饒な巨島に着く。住民の間には王もなく、すべてが偶像崇拜を奉じ動物さながらの生活をしている。ところでこの島の住民たるや、それぞれ本書で特筆さるべき種族だと思われるから、以下その模様を記述してみたい。島民は嘘いつわりではなく全くほんとうに、頭も歯も眼もが犬に類している。頭部は特にそれがはなはだしくて、まるっきり猛犬そっくりである。（以下略）」（『東方見聞録2』東洋文庫183、平凡社、1971・3、愛宕松男訳）。

イブン・バトゥータの旅行記（14世紀）は『三大陸周遊記』あるいは『大旅行記』として知られているが、これも該当箇所のみを引いておく。「スヌルカーワーンの港にジャワ行きジャンクが来ていたので、それに乗込み、十五日後にバラフナカール国（アンダマン？ビルマのアラカンとする説もある）に着いた。この男達はみな犬に似た口もとをしているが、女たちはまことに美しい。（以下略）」（『三大陸周遊記』世界探検紀行全集2、河出書房、1954・8、前島信次訳、カッコ内は訳者による）。

『澁澤龍彦コレクション3 天使から怪物まで』（河出書房新社、1985・6）に収められている「ベンガルの犬頭人」（ルイス・デ・カモンイス『ウズ・ルジアダス』）の全文を引く。

「見よ、アラカン国を。見よ、かのペゲーの国を。ここはむかし怪物が住まい、女と犬のみにくい交合から生れた怪物しか住んでいなかった。この住民たちは隠しどころに鈴をつけているが、それは王妃の知恵によるもの、この用具の発明でいまわしき過ちを排したという」。

## 「鏡湖」（6-E）

この章では主に、のちに親王によって「春丸」と名づけられることになる少女と南紹国の国王とのそれぞれの出会いが順を追って語られる。当然、冒頭から当時の雲南地方を領していた南紹国についての説明文がつづく。「第四代の皮羅閣が玄宗より雲

南王に封ぜられてから、代々の南紹国の王は中国かぶれをかくそうともせず、ときには北方の成都から漢族の財貨を略奪したり職人を拉致したり、ときには唐の公主を当地へ嫁入らせることをあからさまに唐朝にもとめたりした。南紹国の貴族の子弟にとっては、成都に留学することが最大のあこがれだったようだ」といった具合に。作者は「蜜人」の章からこの章にかけての南紹国関連の記述を、基本的には藤沢義美『西南中国民族史の研究』（大安、1969・3）によって記しているが、ここでは資料との対応関係等については立ち入らない（\*1）。

蜜人を拝した親王は鶏足山を徒歩で下っていく。ふもとに近づくと、とある洞窟の前で極彩色の左右一對の鳥の翼を見つける。真臘国の後宮で見た、鳥の下半身をした女たちを思い出す（「蘭房」）。そのとき洞窟から十五歳ほどの半裸体の女の子が出てきて、親王を見るとなかに引き返してしまう。親王が隠れて様子を見てみると、やがて女の子が出てきて翼をもって洞窟に入っていく。好奇心から、親王も洞窟に入っていくと、焚き火に照らされた女の子の顔が秋丸そっくりなのに驚く。岩壁のスリットに隔てられて親王は少女に近づくことができない。秋丸とそっくりな女の子を親王はかつてに春丸と呼ぼうと決めるが、やがて焚き火が消えて少女も眠ってしまう。そのとき、洞窟の内部に蜜語をわめく数人の男たちが侵入してくる。隊長らしき男との唐語を介した話で以下のようなことがわかる。——少女は南紹国の宮廷専属の妓女で、内宴の際に鳥に扮して歌舞を演ずる役目のものだったが、教坊を無断で逃げだし、行方をくらましていたのだということ。ただ、この舞楽の舞い手にはそれにふさわしい身体的条件が求められる。初夏の候、雷が頻々とはためくと、雲南の南で遊牧生活を営む女たちのなかに、雷に感応して卵を生むものがあり、妓女はもっぱらこれら卵生の娘たちのなかから選ばれるのだと。

卵ということばを聞いて、親王は遠い記憶の底から、添い寝をしてくれた薬子が「そうれ、天竺まで飛んでゆけ」と暗い庭に投げた小さな光りもののイメージを思い出す。この文脈の続きで、作者はこう記す。「清の檀萃の『滇海虞衡志』卷六によれば、雲南に女の顔をした迦陵頻伽てんかいぐこうしという鳥がいて、声は聞えるけれどもすがたを見ることはできないという。もし親王がこの記事を読んでいたら、ただちに連想がはたらいて、秋丸も春丸も迦陵頻伽の一類ではなかろうかと思ったところであろう。しかし残念ながら、さすがの親王もそこまでは思いおよばなかった」。

時代錯誤のユーモアは相変わらずだが、ここにはこの物語を構成するひとつの柱になっている着想が、やや露骨すぎるほどの形で示されている。その着想のもとになった『滇海虞衡志』とはそもそもどういう書物なのかについての説明はとりあえず必要ないだろう。なぜなら、作者が実際に参照しているのは李家正文『黄金文化史考』のある一節だからだ（詳細は（\*2）に譲る）。雲南——迦陵頻伽——□-□-□羅羅人——卵生の女——秋丸——春丸という一連の存在。これらに加えてわれわれは、その死の後にも夢を介して親王に深い影響力を与えつづける薬子が迦陵頻伽に重ねられる事態をすで

になんども目撃している。物語の冒頭の章（「儒良」）で作者はまず出自の定かでない不思議な少年として秋丸を登場させ、やがてそれが少女であることが判明するのだが、秋丸あるいはその一族は「蘭房」の章では珍家欄の姿で変奏される（煩雑なので省いたが、秋丸はジャヤバルマン一世の子どもであることが彼女のもっている貝によって暗示される。「本質」は時間・空間を超えて遍在するのだ）。親王は秋丸とともに旅をしながら、秋丸という存在の本質が帰属しているトポスへと遡行していくことになる。親王は少女を宮廷へと連行するその一行に同道して、馬で洱海じかいのそばの王城（大理城）へ向かう。舟で洱海を渡るとき、隊長（蒙剣英という名）は「あの鏡のような湖のおもてをのぞきこんで、そこに顔がうつらなかつたときには、そのひとは一年以内に死ぬといういいつたえがあります」と話す。また、現王である世隆（第十一代）は二十歳になったばかりだが（\*3）、変ったお方だと告げる。舟からおりるときに何気なく湖水に顔をうつしてみると、自分の顔がうつっていないので、親王はどきりとする。

到着して数日後、蒙の知らせで陳列室にいる王と対面することになる。齧齒類げっしるいの小動物のような弱々しい表情をした王は、親王の顔を見ると、「負局先生、約束を忘れずにここへいらしてくださいでしたね」とわけのわからないことをいい、親王はあっけにとられるばかり。「負局先生とはなにか、道家の典籍にくわしくない親王には、さっぱり分らなかつた」と作者は記す（\*4）。太后（世隆の母）があらわれ、向かい合った一対の白銅の鏡を指さして親王に事情を説明する。——鏡は二百年ほど前に大唐国の公主が王に降嫁したときに持参したものだが、いつからかこの鏡が息子の恐怖のまともになった。鏡をのぞくと影が生じる（自分がふたりになる）。それは怖ろしい。二つの鏡の間に立てば、影はさらにふえて想像もおよばなくなる。しかし、のぞかすにはいられない。数年前に王が成都にあそんだとき、道家の神術をよくする先生に出会ったが、それが負局先生なのだと。

親王はひとつの策を思いつく。「これからわたしが鏡に封印の法をほどこしますから見ててください」と王にいい、親王が鏡の前に立つと、そこに顔はうつっていない。さらに台上にある二枚の鏡の鏡面を内側にして重ね合わせ、紐でぴたりと縛ってしまう。鏡は永久に封印されて、影は二度とこの世にあふれでることはありませんと告げる。王から蒼ざめた表情が消え、安らぎの色がひろがる。

十日ほど後、親王と春丸は馬上の人となり、伊洛瓦底川の支流に沿って雲南からビルマへの山道をたどっている。春丸は罪を許され、親王の持童になっている。持童になってからは鳥の羽根は着ずに、男の子の服装をしている。死の予感とともに親王の心は悲しみでいっぱいだった。蛇よけのために餞別としてもらった笛を吹きながら進んでいると、「向こうから二頭の馬に乗ったふたりの旅人の近づいてくるのが見える。逆光を受けているので、旅人の顔や姿はよく見えない。路上ですれ違うときにふたりを見ると、親王と春丸そっくりの瓜ふたつのカップルだった。春丸、おまえも見たかと親王が問うと、春丸はとんちんかんな返事をする。見えていなかったらしい。

この章の後半は「鏡」・「影」・「分身」尽くしの観を呈している。春丸を秋丸の「分身」と考えれば（この二人の関係についてはもう少し物語が進行した時点で考察する）、章全体がそうだとはいえるかもしれない。古来、「影」表象にはさまざまなパターンが存在する。あるべき場所に影が存在しない場合に「死」の予兆を見るパターン（この場合影は生命力や魂と見られている）、逆に、あるべきでない場所に影を目撃することが「死」の予兆だと理解されるパターン（この場合は本体から生命力や魂が抜け出た形を影と見ている）。前者が湖に親王の顔が映らない例であり、後者は自分の影と路上で出会ってしまう例である。ちなみにこれは、馬に乗ったゲーテが公園で自分のドッペルゲンガーに出会ったという有名な話（『詩と真実』）を踏まえている。この例はわかりやすいが、見えにくい部分についてあえて触れておけば、そもそも雲南への旅そのものが死の予兆としての分身体験として記されているように思う（\*5）。世隆王に示されているのは、影の恐怖のパターンであって、典型的には江戸川乱歩が「鏡地獄」で描いた無限の自己像との出会いの恐怖である。

世隆王の例といい、親王の死の予兆の例といい、基本的に「影」表象はネガティブな方向で示されているように見えるが、この章の旅は微妙なニュアンスを帯びており、（\*5）に引用した文章の最後の一文が示しているように、明るくポジティブな気分をも湛えているのだ。それは、すでに記したとおり、旅のベクトルが本質の帰属するトポスへと向かっていること起因していると思われる。しかし、このネガとポジとの関係はまだひとつの予兆にすぎない。いずれわれわれは物語のもう少し先で、ひとつの精神が「死」を克服していく類まれなドラマを目撃することになるはずだ。

章の末尾をとりあえず確認しておこう。親王と春丸は一か月を要してアラカン国へ帰りつく。安展は春丸を見て秋丸と勘違いする。秋丸が十日ほど前にふっとり姿が見えなくなったと安展が親王に告げると、親王がびっくりする。その後、秋丸はふたたび親王の前にあらわれることがない。「どうやら春丸の出現とともに、秋丸は消滅したとしか思えなかった。鶏足山の洞窟から、秋丸は春丸に生れかわって出てきたとしか思えなかった」としめくられる。すでに記したように、秋丸と春丸との関係については次章で触れるが、「時間」の問題について念を押しておきたい。「蜜人」と「鏡湖」の章の旅の間は触れられることのなかった「現実」の時間が、親王の帰着とともに「一か月」や「十日」といった形で復活していること、それはとりもなおさず、それらの旅の時間が「現実」とは質の異なるものであることを示しているのだ。

（\*1）この点について『澁澤龍彦全集22』（河出書房新社、1995・3）の「解題」にすでに松山俊太郎氏の指摘がある（全集580頁参照）。ここでは対応の明らかなところを一箇所だけ抜いておく。

『新唐書』の南蛮伝中に、第十代の王豊佑が「中国を慕って父の名をつらねることを肯んぜず」とあるように、初代より十代までつづいてきた古い烏蛮の習俗である父子連名制は、



第十一代の王世隆にいたって断絶する。(中略) おそらく中国かぶれの王にとっては、これが何ともばかばかしく恥ずかしい陋習のごとくに見えたのではないだろうか(『高丘親王航海記』)。

「第10代豊佑は「慕中国、不肯連父名」ともみえるから、彼の華化的一面がうかがわれ、彼が唐に入寇した動機には、唐文化に憧れて、これを思いのままに得ようとの意図があったことを推察させる……」(『西南中国民族史の研究』544頁)。

(\*2) 以下の引用は同書の「迦陵頻伽について」という章の一節である。

「この鳥は、好声・美音・美音声・好音妙音鳥と漢訳され、カラビンカの梵音を迦陵頻伽と記している。ヒマラヤの山中にいる鳥で、生まれる前、殻のなかでもよい声を出して鳴いていたといい、飽きることのない声をしているという。『滇海眞衡志』巻六に、雲南にもこの鳥がいるが、人はその声が聞けるけれど姿を見ることはできない。絳い雲のかなたの空で鳴いているといった。(以下略)」(『黄金文化史考』桜楓社、1984・6、153頁)。

この書物の影響について、(\*1)に示した「解題」で松山氏は『航海記』の基本構造の形成に深いかかわりをもっている」と記し、物語のおよその流れを追いかけたうえで「この書物の寄与は甚大である」と指摘している。

(\*3) 『西南中国民族史の研究』巻末所載の「南詔王統表」によれば、世隆の在位は「859～877」とある。親王が中国を出発した年が865年なので、世隆の在位に齟齬はない。ただし、年齢はわからない。

(\*4) 『列仙伝』中に「負局」あるいは「負極」の名で出る。『抱朴子 列仙伝・神仙伝 山海経』(中国古典文学大系8、平凡社、1969・9)より、概略を抜いておく。——鏡研ぎの道具箱を背負って呉の市中を廻り、代金一銭をもらって鏡研ぎを行っていたが、病気の人には丸薬を与えていた。あるとき疫病が流行し、負局先生の丸薬をもらうとたちどころに治癒したが、一銭も金を受け取らず、人々はこれこそ非凡な真人だと知る。のちに呉山の断崖に住むが、そこを去るに際して霊妙な水が出るようにしておく、その水を飲んだ者はたいてい病気が治ったので、祠がたくさん建てられた…。(澤田瑞穂訳)

(\*5) 鶏足山を下っていく親王の心に以下のような感慨が訪れている。

「なにか自分の中に抜けおちた部分があるような、へんに頼りない気持がする(中略)それが雲南という土地のせい、それとも自分自身のせいにはよく分らない。ともかく三人の従者といっしょに本来の自分をアラカン国にのこしたまま、別の自分がひとりで空を飛ぶ丸木舟に乗って南詔国へ来てしまったのもあるかのような、妙なおちつきのわるい気持がする。ふわふわと自分が軽くなったような気持がする。しかし見方によっては、それは自分という桎梏をふりはらった新たな自由の境地にあそんでいるかのような、さばさばした気分に通じていなくもなかった」。

## 「真珠」(6-F)

死の予感のうちにいる親王。親王一行はようやくアラビアの商船に便乗して獅子国(セイロン)をめざす。船内でカマルという名の波斯人(ペルシャ人)の若者と知り合う。彼はアストロラーベという器具を使って星の高さを観測している。ふたりで話していると、夜明けの海面を生きものらしきものが泳いでいるのに気づく。その日の昼下がりに、その生きものにふたたびお目にかかる。南紹国の王から拝領した笛を吹いていると、海面に顔を出したのだ。儒艮であった。見つけた春丸が気味悪がっていると、儒艮は相手が秋丸だと思って、おひさしぶりですと声をかけてくる。儒艮は続けてこんなことをしゃべる。「思えば、わたしにことばを教えてくれたのも秋丸さまでした。その恩義、かたときも忘れたことはございませぬ。もっとも、ことばをおぼえたおかげで、わたしは地上で一度は死ぬという運命をまぬがれるわけにはいきませんでした。……」秋丸ではなく、春丸だという親王の説明を聞いた儒艮は、おどろいているが、やがて、水中に姿を消す。春丸は儒艮のことばの意味を親王に問う。「自分は一度死んだとっておりましたが、そうすると、あれは儒艮の亡霊ということだったのでしょか」。それはよくわからないと親王はいうばかり。

おそらく読者はここで置いてきぼりを食っている感じを抱く。少し細かい作業になるが、(\*1)に作品の初出時と単行本段階での異同について記したのでまずそちらを参照していただきたい。つまり最初の構想段階では必ずしも儒艮が再生してくるかどうかは定かにわからない。「真珠」の章に至って、明確に再生することが記されたとき、前にもどって再生が予告されるということになっている。「亡霊か」という春丸の問いに親王は答えていない。親王にはわからないが作者にはわかっていることとして、ここでまた「時間」の問題に触れる。一般に濫澤が描く物語世界を「非ユークリッド的」と形容する例が多い。たとえば(\*1)に引いた「解題」で松山氏は「物語の時間・空間が非ユークリッド的な回帰性をもつ点で、これまでにない」作品になっていると指摘している(586頁)。「これまでにない」のではなく、濫澤の作品はすべてそういう特質をそなえているのだが、いずれにせよこれだけでは、ふつうの空間・時間の扱いと異なっていると指摘しているだけであって、特質そのものの指摘になっていない。「時間」に限って言えば、すでに記したように、「現実」の時間が無化されていく(永遠化されていく)傾向をもつとともに、「輪廻」を前提とした「永劫回帰」の時間、現象としてはある「既視感」<sup>デジャヴュー</sup>として表現される(「うつろ舟」の項等参照)。物語のつづく部分で春丸は続けていう。秋丸さまのことはよく知らないが、「それでも、どういふものか、遠いむかし、わたしは儒艮に会ったことがあるような気がしてならないのです。(中略)たしかに生れてからのちは見たことがありませぬ。でも生れる前は……会ったことがあるような気がするのです。そういえば儒艮に人間のことばを教えたような気もいたします。前の世の記憶というのでしょうか。みこ、思いあたる

ことがおありなら、どうかお示してください」といわれても、親王は返事のしようがない。

親王の外側にいる作者によって想定されているのは、まさに永劫回帰する時間であって、そうだとすると（春丸が前世において秋丸だったとすると）、たとえば前章における親王の旅はいったいどういう時間を生きていたのかという問いが自ずから生じてくるのだが、実は少し考えればわかるとおり、永劫回帰する時間とは時間の流れを認めながらそれを最終的には無化しようとするパラドクシカルな理念なのであり、かりに輪廻がひとつの輪を描いてしまえば（「三つの髑髏」参照）、時間を測る座標軸は失われてしまう。親王が物語のなかで経験しているのはそういう錯綜した時間なのだ。

ついでに秋丸と春丸との関係についても触れておけば、彼らは合体して春丸になったのではない。前章では触れられなかったが、澁澤における分身譚のきわだった特徴は、そこにプラトニズムが反映することであって、「迦陵頻伽」という本質的な「一」が、あるときには秋丸としてあるときには春丸として登場するのであって、本質的な「一」に変わりはないのだ。

少し先を急ごう。親王一行を乗せた船は順調に獅子国をめざして進んでいる。ここでも、プリニウス『博物誌』第六巻では、獅子国は「タプロバネ」と呼ばれており、「アンチポデスの国」（地球の裏側）と考えられていたこと、第九巻では世界で最も真珠を産出する国として紹介されていたこと、また、世に名高い真珠の産地は海南島の合浦（かっぽ）が思い浮かぶが、セイロンもそれに劣らず有名であることが、法頭の『仏国記』やアレクサンドリアの商人コスマスの『キリスト教地誌』などの文献が多様に引かれることで示される（\*2）。

遠くに島影が見え、近づいてみると岩礁に十数人の人間がいてなにか仕事をしている。カマルの通訳で彼らが真珠採りをしていることがわかり、見学をすることになる。海に潜る男たち。もどった男たちの口のなかには多くの真珠。大粒の真珠を差し込まれた親王がそれに見とれていると、円覚が口をはさむ。——美しいものには不吉なところもある。『淮南子』の説林訓に「明月ノ珠ハ蚌ノ病ナレドモ我ノ利ナリ。虎爪象牙ハ禽獸ノ利ナレドモ我ノ害ナリ」とあるように（蚌とは貝のこと）、真珠というのは貝にとっても病にほかならず、病める貝の吐き出した美しい異物、それが真珠であり、美しさとは病とは相関関係にあるらしい。つまり、みこの身に災いをもたらすのではないかと。こんどは安展がいいかえす。——わたしにいわせれば、みこのところが美しいのと真珠が美しいのとは相似をなしてぴったり重なる。たとえそれが病気の結果だとしても、それはそれでいいではないか。「考えてみれば、みこが真珠のような明珠をこよなくお好みになるのも、失礼ながら、まあ一種の精神の病気といえはいえないことはないかもしれない。とすれば、この真珠はみこの精神がこの世に生み出したものともいえるだろう」と。それを受けて親王は、「なるほど、安展のいう通り、この真珠はわたしの窺とした予感が生み出した、わたしを待っている死の結晶なのか

もしれない」と思う。

この一連の会話と思考には、重要な転回が含まれている。真珠を病と美との相関のうちに見出し、その真珠を愛する精神の病性を指摘したのちに、その真珠は病んだ精神がこの世に生み出したものという転回を経て、みこが真珠を自らの死の予感と同定するとき、そこにはまさに精神のみがなしうる劇的なドラマが生じている。モノがあってそれに愛着するという順序ではない。精神があってそれにしたがってモノが生みだされるのだ。これは作品の構造にも通じている。というより、澁澤の生涯とはこういう逆説を生きることだった。生にとって絶対的な力として迫ってくる死、ふつうわれわれはそれをどのように受けとめるかという姿勢でしか臨めない。澁澤は自らの精神の力によってそれをもねじ伏せてみせたのだ。

旬日を過ぎても獅子国の海岸は見えず、船は魔の海域に入る。船中には異常な行動を示すものが増えてくる。そんなある夜、はるかな海上から一隻の帆船が近づいてくる。古代の軍船とおぼしく、近づくと、船上には霧の中へとけこんでしまいそうな影のような人間があまたいる。互いの舟の舷と舷とが接すると、男たちは鉤縄をかけてこちらの船に乗りこんでくる。男たちは親王やそばにいた春丸のからだに冷たい手を触れてくる。春丸は気を失ってしまい、親王も無抵抗を貫いていたが、真珠一顆を収めた虎皮の火打袋に彼らの手が伸びてくると、親王は男たちの手をふりはらい、相手の胸を打つ。あらそっているうちに火打袋がやぶれ、真珠がころがりでる。もはやこれまでと親王は思わず真珠を自分の口に入れて呑みこんでしまうと、とたんにくらくらとしてその場に昏倒してしまう。

長い昏睡から目覚めたとき、のどに痛みというか異物感をおぼえる。吐き出そうとしても吐き出せず、呑みこもうとしても呑みこめない。記憶の糸をたどると、真珠を呑みこんだことが思いだされる。「だれかいけないか」と大声を出して、すっかり声がかすれてしまっていることに気づく。のどの痛みは本物の病気にちがいがなかった。一年以内に死ぬとすれば、これで死ぬ以外には考えられない。そう思うと、親王はほっと肩の荷をおろしたような気分になる。運命の車が死期とやらを準備してくれている。「死はげんに真珠のかたち<sup>ごと</sup>に凝って、わたしののどの奥にあるではないか。わたしは死の珠を呑みこんだようなものではないか」。そして死の珠とともに天竺へと向かい、それがはじけるとともにわたしは酔ったように死ぬ。いや、わたしの死ぬところが天竺だといってよい。「死の珠がはじければ、いつでも天竺の香気を立ちのぼらせるはずだから」とにわかにな気分が明るくなる。

咽喉癌の手術後の澁澤とこの記述とを重ねる発言はすでにある。というより、誰もがそれを想定するだろう。「死」が不可知な運命として半ば受け容れられながら、一方で、自分の精神が生み出したもの（オブジェ）としてそれを具象化し、それを受け容れるという手続きをとることで獲得されているみごとな晴朗さ。

( \* 1 ) 『澁澤龍彦全集22』の「解題」中の「校異」によると、「儒艮」の初出時(『文学界』1985・8)では「おれはことばといっしょに死ぬよ。」で終わっているところが、単行本段階(文藝春秋、1987・10)では、この文章につづけて、「たとえいのち尽きるとも、儒艮の魂気がこのまま絶えるということはない。いずれ近き将来、南の海でふたたびお目にかかる。」と追記されている。

( \* 2 ) 参考までにプリニウス『博物誌 I』(雄山閣出版、1986・6)の該当箇所を引いておく。

「タプロバネクセイロン」は、「反対国人の国」という名で、長い間いまま一つのちがった世界であると考えられていた。(中略)住民はパラエオゴノスという名前をもちインド人よりも多くの金と大きな真珠を生産するとのことである」(第六巻、264頁)。

「貴重品の中でも第一位の地位、最高の位が真珠によって保持されている。(中略)それをいちばん多く産するのは、われわれの世界巡回の際述べたように、セイロンでありストイディスであり、さらにインドのペリムラ岬だ」(第九巻、415頁)。

## 「頻伽」( 6 - G )

いよいよ最終章に至った。親王の最期がどのようなものであったかはもちろん不明のままだが、鎌倉期の記録に出る「餓虎投身」という伝承を澁澤はそのまま用いて親王の死を語っている。その死に至るまでに、なおいくつかの物語が記される。その中心に置かれているのは、世界最大の花ラフレシアとミイラに関する話だが、順を追って眺めてみよう。

漂流のすえに、親王一行の船はスマトラ島に漂着する。島にはスリウィジャヤという梵語名をもつ国があり、栄華をきわめた仏教国であること、唐土では室利仏誓の音訳文字を宛てることなどが触れられる。

親王一行は島を探検に出かける。密林の窪地に沼があり、そのほとりに直径一メートルほどの毒々しく赤い奇怪な花を見つける。およそ一千年後にイギリス東インド会社のトマス・スタンフォード卿がこの花を発見してラフレシアと名づけたことはよく知られているといった解説が入る(\*1)。異臭を放つ花を遠くから眺めていると、背後に声がする。盤盤国にいたときに覚えたマライ語で安展が話をする。男はその花の花守だという。なんのために花を守るのかと問うと、人間の汁を吸ってミイラにしてしまう花で代々の王妃のミイラをつくるためだと男は答える。

おりしも彼方の谷でほら貝を吹き鳴らす音が響く。王妃の寺まいるの行列じゃと男はいう。見物に行くとよい、ひとたび王妃に子どもが生まれれば眼福も望めなくなると、不思議なことをいう。象の上に乗った十七歳にも満たない王妃を見て、その驕慢さに菓子思い出すが、前にどこかで会ったような気がする。盤盤国のおてんば娘パタリヤ・パタタ姫だった。盤盤からスリウィジャヤに興入れしてきて王妃となってい

るのだ。この場面で、作者はわざわざパタタ姫がまだ娘のころ、原因不明の憂鬱症にかかって、獾の肉を食うことをすすめられたことがあったこと、そのとき父も侍女も姫が肉を食ったものと信じていたが、「じつは姫は頑強に手をつけず、ただ皿の肉をこっそり捨てて食ったように見せかけていた」こと、獾の食う夢の提供者であった親王も「そのことには少しも気がつかず、ただ自分の夢を獾が食い、その獾の肉を少女が食っているのだから、自分と少女とは一体化したも同然だと無邪気に信じていた」と、「獾園」の章の記述と重複させながら断わり書きのように記している。一見、不可解な部分だ。つまり、そういう話だとしていたものを、わざわざ後になって否定するのは、否定することになにか意味がある場合だろうが、その意味がわかりにくい。おそらくここには作者の本質的な傾向性のようなものが現われているのではないかと思う。それは作品「撲滅の賦」以来の傾向性。モノに観念が宿るだけではない。女性像にもそれは宿っている。観念が絶対的であればあるほど、「私」は最後にそこから疎外される。秋丸も春丸も、その本体の迦陵頻伽も、薬子もパタタ姫も、彼女たちは親王にかぎりなくよりそいながら、だれも親王と一体化することはない。

一ヶ月後、親王は宿舎である小屋に臥せっている。食欲のない親王。そこへパタタ姫が訪ねてくる。自分の死の予感を口にする親王。姫もまた、わたしも一年以内に死ぬことになった、お会いした日から月のものがなくなったと不思議なことをいう。意味がよくわからないまま、姫に案内されて彼女が死んだら入ることになっている墓廟に連れていかれる。ピラミッド状の建造物があり、松明をともして内部に入ると、壁ぎわに等身大の仏像らしきものがならんでいる。よく見ると半裸の女人像で、生きている姿そのままだ。姫の説明——スリウィジャヤの歴代の王妃たちの肉身像で、子どもを生んだ後に、安んじてミイラになったのだと。何百年も前から続いている風習で、みなすすんでこの墓廟に入ることを待ちのぞんだのだと聞いている。「わたしにしても同じことで、若さを永遠に保ちながら、史上最年少で墓廟入りすることを、この上なく晴れがましく思っていますわ。墓廟はわたしが若いままで永遠に生きることできる場所ですもの」と。

どういう方法でミイラになるのかと親王が聞くと、姫は、あの赤い大きな花の上にとだすわっているだけで、非の打ちどころのない一体のミイラになるのだと答える。当然のようにここで親王は日本でミイラになった高僧の例として空海和上の話をするのだが、ミイラに関してこれ以上ことばを重ねる必要はないだろう。

やがて、死んでもよいから天竺へわたりたいと考えている親王に、姫は「餓虎投身」の故事を語り、海を隔てた北方の羅越国には虎がおびただしくいて、つねに羅越と天竺との間を往復している。死んで天竺へついてもかまわないというのなら、この虎にみずからすすんで食われ、「虎の腹中に首尾よくおさまって、悠々として天竺へ乗りこむのも一法かと思いますが」いかがですか、と残酷な提案をする。聞いた親王はむしろ、なんたる妙案だろうと声をはずませる。

小屋にもどった親王は従者三人に「餓虎投身」による天竺行を告げ、反対する彼らを説き伏せてしまう。四人が羅越に向かおうとする前の日、春丸に小石を拾ってこさせた親王は、むかし薬子が夜の庭に向かって光るものを投げたのを真似るように、「そうれ、天竺まで飛んでゆけ」と歌うようにいう。その夜、親王は次のような印象的な夢を見る。

——パタタ姫が親王の寝所にやってきて、のどに指を突っ込んで真珠を取りだしてくれる。姫はいう。「ミーコに死をもたらすのが、この真珠よ。でも、それがこんなに美しいのよ。美しい真珠をえらべば、死を避けることはできません。死を避けようとするれば、美しい真珠を手ばなさなければなりません。さあ、この二者択一をどうなさいます。……」いっているのがすでに姫ではなくて薬子になっている。薬子の手にある真珠も小石ほどの大きさになって光りかがやいている。「だいじょうぶよ、みこ。御安心なさいませ。たとえこの世でいのちは尽きるとも、この光りものが海を越えて日本へたどりつけば、そこからまた、みこのいのちがしぶとく芽えはじめますから。みこはただ、霊魂になって永遠に天竺であそんでいけばよいのです」。そういうと、薬子は右手を振りあげて光る石を外へほうり投げる。「そうれ、日本まで飛んでゆけ」。石は光の弧を描いて空のかなたに消え、それとともに薬子のすがたも消える。

石や珠の微妙な変容。それは美であり、同時に死でもあった。その珠を喉から取りだして放り投げるとき、どこか子どもじみたその行為の象徴性のうちに、珠は死から命を宿したものにへと変容する。こうして、死の想念の凝ったものとしての珠は最後に、暗示された輪廻の生へと解き放たれる。

みこの最期を見届けておこう。三か月以上もかかって羅越に到達した親王は、ある藪のなかに入って草原に身を横たえ、弥勒の宝号をとえつつ虎がくるのを待つ。着いた明るる晩、親王はついにもどらず、三人が藪に踏みこむと、親王の姿はなく、血に染んだ骨がいくつか、朝の光に照っている。従者たちは身も世もなく泣きに泣く。そのとき、一羽の黄緑色をした小鳥が空へと翔けあがる。「みーこ、みーこ、みーこ……」小鳥の顔は春丸そのもので、目にいっぱい涙がたまっている。小鳥は虎とともに天竺へ行くらしい。こうして「広州を出発してから一年にも満たない」親王の不思議に満ちた旅が終わりを告げる。

(\*1) トマス・スタンフォード・ラッフルズがジャワ島に赴任したのは1811年、帰国後の1817年に『ジャワの歴史』を著す。花の名は彼の名にちなんでいる。

付記：『澁澤龍彦全集22』の「解題」に記されている「創作メモに残された書名」だけでも相当な数になる。いちいちの書名と物語内容との対照について記すだけでもたいへんな作業であり、一定の範囲に限定せざるをえなかった。あくまで物語内容の読み方や鑑賞を中心に記したが、参考資料によっては物語内容に大きな影響を与えているものがあり（影響の質はさまざま）、とくにカルヴィー

## 物語のアラベスク part 7

ノ『マルコ・ポーロの见えない都市』やドーマル『類推の山』といった外側の物語との関係性について触れるゆとりがもてなかった。「Ⅲ 関連作品（物語群）」の個々の章を参照していただきたい。

（後注）

## I キー・ワード（物語要素）——

- 1 迷宮、2 鏡、3 天使、4 鉱物、5 鳥、6 船、7 怪物、8 城、9 花、  
10 球体、11 裸婦、12 人形、13 両性具有、14 天竺、15 時間、16 悪魔、17円環、  
18 仮面、19 狐、20 首、21 箱、22 分身、23 変身、24 夢、25 逆宇宙

## II 作品解説（物語分析）——

- 1 『エピクロス of 肋骨』…… 1-A 「撲滅の賦」、1-B 「エピクロス of 肋骨」  
2 『犬狼都市』…… 2-A 「犬狼都市」、2-B 「陽物神譚」、2-C 「マドンナの真珠」  
3 『唐草物語』…… 3-A 「空飛ぶ大納言」、3-B 「女体消滅」、3-C 「三つの髑髏」、3-D 「金色堂異聞」、3-E 「六道の辻」、3-F 「蜃気楼」、3-G 「避雷針屋」  
4 『ねむり姫』…… 4-A 「ねむり姫」、4-B 「狐媚記」、4-C 「ぼろんじ」、4-D 「夢ちがえ」、4-E 「画美人」、4-F 「きらら姫」  
5 『うつろ舟』…… 5-A 「護法」、5-B 「魚鱗記」、5-C 「花妖記」、5-D 「髑髏盃」、5-E 「菊燈台」、5-F 「髪切り」、5-G 「うつろ舟」、5-H 「ダイダロス」  
6 『高丘親王航海記』…… 6-A 「儒艮」、6-B 「蘭房」、6-C 「猯園」、6-D 「蜜人」、6-E 「鏡湖」、6-F 「真珠」、6-G 「頻伽」

## III 関連作品（物語群）——

- 1 『悪徳の栄え』（サド）、2 『さかしま』（ユイスマンス）、3 『大理石』（マンディアルグ）、4 『オルフェ』（コクトオ）、5 『長靴をはいた猫』（ペロー）、6 『博物誌』（プリニウス）、7 『放浪者メルモス』（マチューリン）、8 『列子』、9 『夢』（ジャン・パウル）、10 『阿片吸引者の告白』（ド・クインシー）、11 『オーレリア』（ネルバル）、12 『砂男』または『ファルーンの鉱山』（ホフマン）、13 『続本朝往生伝』（大江匡房）、14 『エレホン』（S・バトラー）、15 『未来のイヴ』（リラダン）、16 『仮面物語』（ジャン・ロラン）、17 『眼球譚』（バタイユ）、18 『変身譜』（オウィディウス）、19 『アレフ』（ボルヘス）、20 『死都ブルージュ』（ロデンバック）、21 『千夜一夜物語』、22 『マルドロールの歌』（ロートレアモン）、23 『奥州波奈志』（只野真葛）、24 『特性のない男』（ムジュール）、25 『審判』（カフカ）、26 『日月両世界旅行記』（シラノ・ド・ベルジュラック）、27 『モロー博士の島』（H・G・ウェルズ）、28 『類推の山』（ドーマル）、29 『フランケンシュタイン』（シェリー夫人）、30 『本当の話』（ルキアノス）、31 『列仙伝』、32 『聖アントワーヌの誘惑』（フローベール）、33 『超男性』（アルフレッド・ジャリ）、34 『真如親王伝』、35 『夜窓鬼談』（石川鴻斎）、36 『明恵上人伝』、37 『マルコ・ポーロの见えない都市』（イタロ・カルヴィーノ）、38 『玉虫物語』